ふるさと
発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第七十八号（一日発行）
平成八年三月一日

北海の鰊場 古平風土物語（四五）

子供たちの四季の遊びと仕事の手伝い

高橋源五口

― 春 ―

早春の三月、雪解けの早い、黒土の顔が見えはじめた川原の土手ぶちでは、〝小杭打ち（こげぇぶち）〟が始まる。のこやなたを持ち出して土手の柳や雑木を切り、それを手頃な長さに切って先を削り、頭にペンキで鉢巻きを書いたりして、大小さまざま、形もさまざまの小杭を作って争い、その取り合いをする。中には、太い丸太ぐらいの大きさのものもあってなかなか勇壮で、力の入った泥かぶりの遊びであった。

小さい子や女の子たちは、土場の近くの川のよどみに群れる〝闘魚〟をタコ網やごみざるですくい取り、何匹もの闘魚の背中のとげを取り、それを古い柾（まさ）に並べて刺した漁舟を作って、早さや浮かんでいる時間を競い、闘魚柾舟競走にたわむれる。

遊びに夢中のあまり、川にすべり落ちて助け上げられ、ずぶぬれになってふるいながら家に送られる子もいた。

この頃から浜では鰊場の若い衆（鰊の神様ヤン衆）が来て、深い雪の中を、大きな雪引きのこで雪を四角に切り、そりに積んで海に運んで捨てる。船揚げ場や魚坪（なつぼ＝鰊を入れて置く仮の倉庫）、干場の準備をする。

矢来（海に突き出た、丸太で囲った場所）の上や浜辺に引き出されたサンパ船、ホッツ船にはい上がっては船底の板子で、〝源氏こま打ち〟や〝板子パッチ〟が始まる。

＊ 源氏こま一個 大三十銭、中十銭ぐらい。パッチ オッケ（大きいもの）一銭に一枚、チュウケ（中）一銭に二枚、チャッケ（小）一銭に一枚ぐらいであった。

船頭や陸回りの人たちに叱られても追い出されても、すきを見てはアッチコッチと空き船を探しては遊び回る。

夕方になって、古平川原から沖に向かって飛び立って行く、鰊を呼び込むという鴎の大群を見送り、それからやっと家に帰るのである。

こうして三月末頃から、いよいよ待ち望んでいた鰊漁の本番が始まるのである。鰊漁をしている家の子供たちばかりではなく、子供たちは子守り、炊事、鰊場の仕事にそれぞれが追われるようになる。

鰊漁をしていない家の子供たちは、高等科になると漁場に頼まれて、もっこしょいや雑仕事の出面をするものが多かった。子供でも鰊漁期中だと、一日に六、七十銭になり、漁繁期になると学校も、十五日から二十日間は休みになった。町中は老いも若きも、男も女も、子供たちまでが鰊場に総動員される。

鰊の沖揚げが続く間は、出面賃は生鰊で貰うのが通常であった。一日の仕事が終わった後にこの貰った鰊を運ぶので、鰊を家に運ぶのに夜中までかかることがしばしばあった。遠い所や坂を登って運ぶのは大変な仕事であった。

小学校高等科の男子生徒がもっこ背負いで貰う量は、大人の七割ぐらいで、漁場によって多少は違うが一日分は量りもっこ（量り専用のもっこで普通のもっこより大型である）で、走り鰊（獲れ始めの頃の鰊）の時は二もっこ、中鰊（盛漁期）の時は二もっこ半、後鰊（鰊漁の終わり頃）は三もっこぐらいで、女子はこれより二割ぐらいは少なかった。

古平町始まって以来という、今回の豊浜トンネル災害によりお亡くなりになられました方々のご冥福を心からお祈りし、哀悼の意を捧げますと共に、ご遺族の方々には謹んでお悔やみを申し上げます。

平成八年二月二十日

古平町史編纂委員会
委員長 越中庄司

―明治13年茅沼から真冬の山越え―
古平行の記

■人家を見つける

体力のある、元気な文左衛門らを先に送り出してから、一坪あまりの小屋で焚き火をしながら待つことになった。

無事に人家にたどり着き、助けの来ることを祈りながらただじっと待っていたが、午後三時半頃になり、話し声が聞こえ、文左衛門らが二人の人を連れ、握り飯と塩鮭を持って戻って来た。一同は歓声を上げて喜び合った。

「まずはこれで助かったのだ」

ここから半道程（二キロ）のところで一軒の小屋を見つけ、ちょうど木を切りに来ていた人がいて、そこで飯を支度してもらったのだという。

安心して、持って来てくれた握り飯にかぶりつき、一同にも元気が出、久しぶりの笑顔がもどった。なにしろ雪中での数日にもわたる疲労と、ほとんど食事もしていないことから、その味は格別であった。

■元気百倍！小屋へ向かう

一同はすっかり落ち着きを取戻し、「それでは――」と、先の小屋に向かって出発することにしたが、すでに辺りは暗くなり、時刻は五時に近かった。雪は止んでいたが、深い雪の中を主人に案内されて小屋に着き今夜はここに泊めてもらうことになった。

主人は大江嘉蔵といい、古平の町から薪の伐採に来ているのだという。小屋といってもかなりの広さがあり、囲炉裏には大きな薪が焚かれ、飯あり、酒もあって、一同、今までの苦労をすっかり忘れて、心地よく安眠することができた。

あーァ、これぞまさに「王侯の気分」の如しとでもいうのか――。

■古平へ向け下山

明ければ六日、主人に案内を頼み古平に向かうことになった。ここから古平まではおよそ三里余りということだが、道を知った案内がついているので一同の足どりも元気であった。雪に覆われた川を数度か渡り、古平に着いたのはそろそろ日の暮れる頃であった。

◇　◇　◇

文中の大江嘉蔵とあるのは大井嘉蔵のことであり、これより五年後の明治十八年、偶然に金鉱の露頭を発見し、これが後の稲倉石鉱山の開発となった。

中心街としての昔の新地町

渡辺ハツエ

昔のことを思い出しますと、新地町の通りは賑やかな商店街でした。

私も古平町を故郷として七十余年になりますが、もの心のついた子供の頃からいろいろと町の移り変わりを見てきました。

新地町の上、港町から浜町一帯を見下ろす高台には警察署が建っていて、町の治安も行き届いていました。新地町には病院をはじめとして、銀行、旅館、料亭、カフエー、床屋、そして昔は活動小屋といわれていた映画館もあり、そのほか生活に密着した商店がずっと軒を連ねていました。すべてが新地町に行って用事がたりたものです。

・近藤医院、蓮実分院があって蓮実病院の初代院長先生のときからお世話になっていて、今なお現在の先生を信頼して余生をおくっています。

小高い丘の上に新地分教場があって、急な坂道でしたが、登校中に始業を知らせる鐘の音が聞こえると、その坂道を息を切らして駆け上がったものです。友達はとっても早くて、私はようやく後からついて行ったものです。

また、当時も銭湯は一軒よりなかったものですから、鰊漁期になって若い衆が増えると大変な混雑だとよく聞きましたが、となりの男湯の方はいつも騒々しかったように覚えています。

冬になると道路は、真ん中に雪を積むので馬の背のように高くなり、商店に買い物に入るのも、穴の中にもぐるようにして入って行くのです。

荷物を運ぶのも夏は馬車、冬は馬そりでしたから、道路には馬の糞がたくさん落ちますが誰も気にもしませんでしたし、馬車屋さんも当然のことのように手綱をとっていました。ところが、春の雪解けになると道路が馬糞だらけになり、子供といっしょに歩いていても転ばないようにと、ずいぶんと気をつかったものです。

ささいなことでも、記憶に残っていることがあるものです。この間新地町を通り、遠い昔のことを思い出しながらペンをとりました。

文芸

古平ホトトギス会

ホームでの師走の社交ダンスかな　山口　浪

登校見に容赦なかりし吹雪かな　郭公の鳴くや野点の座に侍る　越野清治

積丹の吹雪覚悟の旅仕度　流れ行く流れ行く雲雁渡る

悴みて居れじ一人の厨ごと　斉藤波留　配ばらるる快気祝いの今年米　大島喜恵

夫の手を借りて雛段飾りけり　熊谷楠丈　婚礼の宴たけなわや星月夜

雛段を見つめて孫の送うしぐさ　花ヤツ手大鉢咲きを玄関に　木村芳園

雪像に化粧直しの雪降れり　仲谷美砂　冬いちご粒を揃えて母の忌へ

スキー場灯り夜景の一部分　初雪や拡野に聳へ開拓碑　水見句丈

崩落や雛段飾る気になれじ　仲谷　比呂子　死火山と呼ばれて久しき山眠る　大和田　伊鈴

暫くは喪にあり雛かざれなく　我が庭の今が主役のライラック

※あじさいの雨に打たれて七色に　仲谷安代　リラ冷えという程でなく雨つづく　福井　久美子

夢の中一人りつぶやく秋の唄　千羽鶴触れも出来ずに春逝かれ

除雪車を避け小買物裏通り　越野敏雄　ほとけにも雛を飾り送りけり

寒行の太鼓路地より連らなれる　待つ八日日永を越いし大惨事　福井幸平

臣岩落ち街さわがしき二月かな

※　俳誌『ホトトギス』入選句

《豊浜トンネル災害》

感懐

福井幸平

これから生きていて、もうこんな悲しいことに遇うこともないと思いますが、豊浜トンネルの崩壊事故死については永い八日間でした。

いつまでもいつまでも心に残ることでしょうが、御仏のご冥福をお祈りいたします。ご両親をはじめご親戚の方に心より哀悼の言葉を捧げます。

町長をはじめ役場職員、町内の婦人団体、学校、ほかにも皆一生懸命ご活躍されたことは詳しく報道されましたが、このことについては日本国中、いや諸外国まで電波が流れ、ブラジルからも安否を尋ねる電話があったほどでした。ブラジルでは、例のリオのカーニバルの最中だったと思うが――。

ふだんマスコミ、マスコミと簡単に口にしていますが、今回ほど彼らの執拗なまでの報道、根性はあっぱれと言うほかなし。報道は武器に勝る力なり、としみじみと感じさせられました。その数は何百人か知りませんが、見舞客、自衛隊、警察、消防、開発局などと関係者でごった返しだったようです。修羅場とはかくの如しか――。もちろん宿泊可能なところは完全にふさがったようでした。

私も親戚が災害に遭ったので、そこに毎日のように顔を出していましたが、ご縁のある方無い方、毎日、毎日、遠くより励ましの電話やら、死亡判明後はお花でも上げて下さいと、お金まで同封して下さった方もおりました。ある旭川の方からは、自分の娘もブラスバンドをしていますが他人事とは思われないと、とても涙なくして読まれない文章でした。神を信じたく、人を信じたくなるなんと優しいお方でしょう。

このような立派な方がまだまだ世の中に沢山おられることがうれしい。

救出までの八日間、遺族にとっては腹立たしいこともあったようですが、現場の関係者も命がけで頑張ったことも忘れられないことで、地元の婦人会の方々も朝三時、四時から起きて、炊き出しに一生懸命でした。ほんとうにご苦労さまでした。

それにしても腹の立つのは、手も汚さないで、評論家ぶった下らぬ発言をする人たちでしたが、聞く方の私の誤解ならお許し下さい。

まだこれからいろいろと問題も残っているのでしょうが、ご遺族の方々、手をとりあってこの悲しみに耐えて頑張って下さい。われわれも出来る限りのことをさしていただきます。

× × ×

千羽鶴触れもせずして春待たじ
ほとけにも雛を見せて送りけり

「古平の方言」

――約四百五十語が集まる――

去年から、古平の方言について多くの方からお聞きしてきましたが、ようやくそれらがまとまりました。これからも続けていきますが、ご協力いただいた方には後程お届けいたします。

なお、余分もありますのでご希望の方はお申し出下さい。

☎42-2590（内線-65）

しゃくまんべ

竹内コト

大正末期から昭和初期にかけて、大変悪性の風邪が流行しました。その後、昭和三年頃からはジフテリアという伝染病が猛威をふるって、町内でもそれによる死者が何人か出ました。

当時は医療機関も貧弱でしたが、それよりも現在のような保険制度も無かったので、少々の病気ぐらいではとても病院にも行けませんでした。とにかく、働いて毎日食べるのが精一杯といった生活でしたから。

そこで昔の人は生活の知恵とでもいうのでしょうか、当時の沢江村（沢江町）では、おばぁさんたちが集まって〝シャクマンベ〟といわれている行事がありました。

私も子供の頃、よくおばあさんたちについて一緒に歩いた思い出があります。

冬の日暮れは早いのですが、暗くなるとおばあさんたちが集まって来ます。そして午後七時頃から鐘の音と共に、おばあさんたちが大きな数珠を持って「南無大師観世音、南無大師観世音」と唱えながら、町内を一軒ずつ拝んで回るのです。これは『風邪を追い払うおまじない』なのです。

すると、どこからともなく大勢の人が集まって来て数珠の回りを囲み、「無病息災」をお願いします。

〝シャクマンベ〟のことはよく知りませんが、いつの間にかその集まりはなくなってしまったようです。

昔の人はなんにつけ神仏にすがって、病気や災難から家族や自分を守ろうとしていたのです。お金が無いと、お医者さんにも見てもらえないという時代のことです。

◇　◇　◇

この『シャクマンベ』という言葉の意味を禅源寺の副住職さんにお聞きしたら、『百万遍（ひゃくまんべん）』という言葉がなまったのではないか、ということでしたので調べてみたら、やはり『百万遍』から出たことが分かりました。百万遍というのは『百万遍念仏』を略したもので、文字どおり百万回念仏を唱えるという意味です。

中国で始まったものがその後日本に渡って来て、法然上人（浄土宗の開祖）の三回忌に、多くの人を集めて七日間念仏を唱えたのが最初だといいます。一般には亡くなった人の追善の意味で行いますが、後には、安らかで無事を祈るための祈祷として行われるようになりました。

京都知恩寺の第八世住職・善阿が、流行病をなおすために七日間百万遍の念仏を唱えたところ、その効験があったので天皇から『百万遍』という寺号を賜ったとあります。

それ以来浄土宗では災難が起こると坊さんや信徒が集まって、阿弥陀の名号を唱えながら、大数珠を百回繰り回す『百万遍念仏』をすることが恒例になったそうです。

願雄寺（浄土宗）にも大数珠があって、お参りの日にはこの数珠を百回まわしてご祈祷をしているとのことです。

昭和初期、当時の沢江町のおばあさんたちは浄土宗の修業にならって、悪病退治のご祈祷をして歩いていたものと思われます。

遥か一万キロの異郷で聞く故郷の話題

里仁（じんり）

名達博吉
（埼玉県所沢市在住）

中国の古い書物に『里仁』という言葉があります。「仁に里る（じんによる）」と読み、「仁の心を拠り所として生きる」という解釈が一般的ですが、それ以外に「里に仁あり（さとにじんあり）」と読み、「故郷には情に厚い人たちがいる」という解釈もあることを知りました。

＊　＊　＊

「失礼ですが、日本からいらっしゃった方ですか？」

出張先のスリランカ（旧セイロン）の首都コロンボ中心街にあるレストランで客と昼食をとっていると、隣で食事をしてた青年が立ち上がって流暢な日本語で話しかけてきました。

「私はサマン・ダサナイカという名で、コロンボ大学の助教授をしています。小樽商科大学に三年ほど留学して今年の春帰国しました。」

私も小樽商大の卒業生であることから話がはずみ、私の出身地である古平を知っているかと聞いてみました。

「もちろん知ってますとも。北海道の留学生の間では、第二の故郷として有名な町ですよ。マレーシアのソーさんやタンテリさんなど、古平に行くのを何よりの楽しみにしている留学生がたくさんいました。私自身も、古平幼稚園長の浅野恵子先生に大変お世話になりました。」

将来はそれぞれの国を背負って立つ身でありながら、物価の高い日本で切り詰めた生活を余儀なくされ、家族から遠く離れた地で心細い毎日を送っている発展途上国の留学生たち。古平の有志の方々が彼らを時々町に呼んで、家族ぐるみでお世話しているという話は聞いていましたが、まさか遠い異国の地で実際にその話を聞くとは思いもよりませんでした。

そして以前帰省の際、そんな留学生を時々ホームステイさせている近所の中村さんから、「留学生の人たちと話をしていると、自分たちが広い世界の一員であることを改めて実感するの。ナンも世話してるなんて気持ちじゃなくて、いつも頑張ってるあの人たちが古平に来て、喜んでくれる姿を見るのがなによりうれしいからやってるんだ。」と、言っておられたのを思い出していました。

ダサナイカさんと固く握手して別れた後、一緒に昼食を囲んでいた取引会社の重役に、「名達さんは良い故郷をおもちですね。」と言われた時には、思わず胸が熱くなるのを感じました。

＊　＊　＊

私は古平を離れて二十五年間、東京に本社を置く貿易会社に勤務しています。こちらには『東京古平会』という会があり、古平出身者二～三十人が年に二度程集まって、故郷の思い出話や最近の古平の話題を肴に酒を酌み交わします。東京近郊で頑張っておられる文字どおり老若男女、仕事もさまざまですが、共通しているのは皆さんそれぞれ古平に生まれ育ったことに大きな誇りを感じ、たまらなく古平を愛していることです。

私は次回の古平会で、スリランカでのことをお話しょうと思っています。

「ソーなんだ。何たってハ、古平の人たちだもの・・・」と、得意そうに胸を張る湯田会長の姿が今から目に浮かびます。

遥かなる故郷の思い出

〔18〕

”サンマは寝て待て”の話 上

橘　義春

これは確か――あの古平の大火の前の年であったから、昭和二十三年のポカポカ陽気の六月頃だったと思う。

親戚の笠谷正吉さん（現在余市町に在住）から、

「サンマ獲りにいがねが。もうそろそろ来る頃だべ」

と誘われた。

「サンマ、どやって獲るんだ」

「なぁーに、”サンマは寝で待て”といってナ、寝で待ってればサンマの方から獲ってけれって寄って来るべサ」

と言う。

「そったらうめェ話しってあるもんだべが」

「それがあるんだってば。まぁ俺サまがせでケレ」

「俺のどごに、道具なんもねェど」

「あるべサ。古タル木の六尺もの二本ど三尺もの二本、それど古むしろ一枚、それだけだ。おめぇサそれ頼む。磯舟は俺が支度するから……」

「よォーし」　これで話は決まった。

「魚を獲るには網か釣りが常識だのに、タル木と古むしろで魚を獲るなんて、そったらもんで獲られる魚がいだとしたら、少しばかりハンカクサイのではねェべが――」

と思ったりした。

早速家に帰り、わが家の釣りの名人・祖父に、

「今日、笠谷の正吉さんからサンマ獲りにいぐべぇって言ってきたども、タル木ど古むしろでほんとにサンマって獲れるものだべが？」

と聞いたところ、祖父の言うには、それは昔からあるひとつの漁法で、タル木で枠組みをしたものにむしろを張りつけ、その底にごも（ほんだわら）をいっぱいくくり付ける。むしろに自分の握りこぶしが入るぐらいの四角い穴を二つ開け、それを海に浮かべて、磯舟の横にくくり付けておく、それだけでいいのだそうだ。

四角い穴に握りこぶしを入れ指をニギニギすると、その指の間にサンマが飛び込んでくる、そいつをグイッとつかんで、舟の中へ放り込むという漁法である。

どうも話が少しうますぎるようだが、祖父の経験談だと、サンマはゴモのようなものに産卵をするのだが、その時に、狭い隙間に入り込んで腹の中の卵をしぼり出さないと産卵ができないそうだ。だから、指の隙間に強引にもぐり込んでくるというわけである。

いわばサンマのお産を漁師が手伝うような振りをして”御用だッ”と取っ捕まえてしまおうというのだ。

「なる程ネー」

しかし、昔の人はうまいことを考えたもんだ。最初にこの漁法を考えついた人は、相当に頭の良かった人だと思った。サンマの習性をうまく利用した点は理論的で、漁具は古物とゴモでゼンコはかからない、経済的な効果は大なるものがある。

（つづく）

【きょうはこんな日】

戦闘機『古平号』の献納式

―陸軍〔ハヤブサ〕・海軍〔ゼロ戦〕―

[昭和19年]

太平洋戦争の戦況も次第に日本に不利になってきていたが、国内では戦争への協力はいぜんとして盛んであった。

古平町では陸軍と海軍に戦闘機を一機ずつ献納することになり、広く町民からの献金を呼びかけ、昭和十九年三月八日、古平尋常高等小学校の運動場で全校児童・生徒の見守る中、町や軍の関係者によって献納式が行われた。

先頃、ある町が飛行機を献納したことが軍によって称揚され大きく報道されたことから、その後、市町村が競うようにして飛行機の献納運動が始まった。

古平町が献納したのは通称＝隼（愛国第3264・古平町）と零戦（報国第2901・第二古平号）の二機で、各町内会などを通じて集まった金額は二十五万三千三百五十四円であった。

この二機の写真はあるが、詳しいことは不明である。金額でいえば、当時の町予算は約九万円、町長の月給が百五十五円、町民一人当たり約二十八円になるがこれは大変な金額である。

《刺網》と《建網》の対立

網切り騒動 (2)

▼松前近辺で鰊が不漁

文化・文政の頃（一八〇四～一八二九）は、西蝦夷地での鰊漁はすべて刺網だけであったがその後、アッタ（厚田）・ヲタルナイ（小樽）辺りでは、笊網（ざるあみ）などの大網が使われるようになってきた。

ところがこの頃から十余年にわたって、松前では鰊の群来が全く無く、江差辺りでは不漁が十余年にわたって続いた。この地方の漁民たちは、以前から笊網や起し網を使うことには反対していて、これらの大網を禁止し、昔のように刺網だけで漁をすることを願い出ていた。

▼大網との対立

しかし、その後いっこうに守られないばかりか、クトウ（久遠）から厚田にかけてますます大網を使う者が増えていった。

これは場所請負人が一定の運上金さえ払えばあとは自分たちの利益になることから、かくれて笊網といわれる大網を使い、盛んに漁獲高を上げていた。

それにひきかえ江差周辺から南の漁場では不漁の続くことから、大網が鰊の漁獲を妨害しているというのが漁民の言い分であった。

そして安政二年（一八五四）の春になり、江差から熊石村までの漁民が追鰊（おいにしん）に出かけるといって、乙部村の真之吉、蚊柱村の三蔵らが先に立って、三半船（サンパ）・保津知船（ホッチ）などの和船合わせて五、六十隻におよそ四、五百人が乗り込んだ。

漁民はそれぞれ手に山刀・腰マキリ・鎌・手おのなどを持って漁場に押しかけ、シマコマキ（島牧村字泊）から中場所へかけて、大網を見つけては手当たり次第にさんざんに切り破っては北へと進んだ。

このことは各場所に伝わり、それを聞いた網元たちは海から網を揚げ蔵などや、中には山中にまで隠した者もあった。しかし、その土地の漁民の中にも、大網を使って漁獲することを快く思わない者もいて、夜になるとその仲間に加わり網を切り破るということもあった。また土地の者の中には網をそのまま持ち去る者もいて、容易ならざる騒動となった。

ちょうど時期からいうと鰊の群来の最中という漁場もあったが、このような騒ぎで漁も満足にはできず薄漁で終わった。

▼フルビラで騒動が静まる

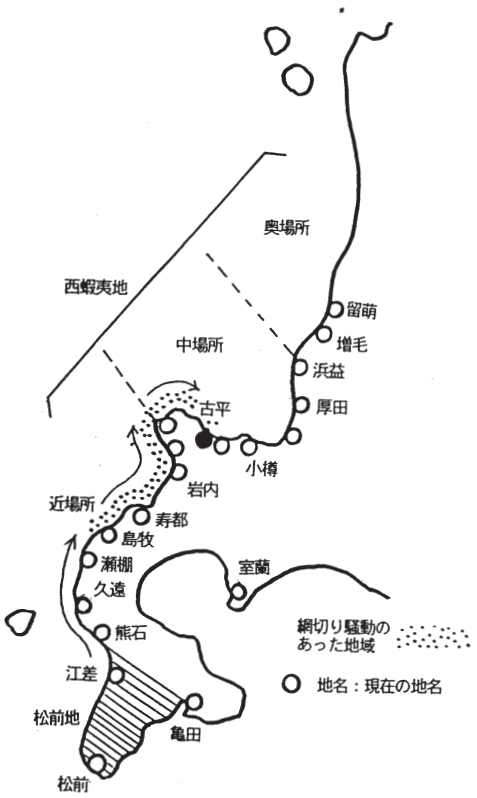
その後も勢いは衰えることもなく、海の難所で知られる神威岬を越えて古平郡群来村（群来町）にまで進んで来た。

折から石狩詰の幕府の役人が群来村に来ていて、当時、町内で床屋をしていたという元弘前藩士の赤岩定吉らと共に、上陸してきた首謀者を捕らえた。首謀者が捕らえられたことによって逃げ去る者が多く、この事件もここで事実上終わった。

しかし中には、高嶋村方面まで行く者もあったが、あらかじめその付近の漁業者らは大網を山に隠したりしていたので、甚だしい損害は無かったという。

この群来村での出来ごとについて『安政年間笊網騒擾顛末』には次のように書かれている。

「尤右網切連ハ口場所ヨリ順々暴行致シ、中場所フルビラニ於テ、同所御詰合ノ御諭ニテ、漸ク鎮静仕、同所ヨリ何レモ帰村致シ申候。――」

▼請負人からの請願

この事件の起こりは、請負人たちが藩からの『大網禁止』の禁令を犯したことにあるので、たとえ損害を受けたとしても訴えることもできず、結局は泣き寝入りするしかなかった。そして一同連署で請願書を出した。